

2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台 デザインへの「火焰型土器」の採用について

火焰型土器は、約 5,000 年前の縄文時代中期を代表する土器であり、その大部分が信濃川流域を中心とする新潟県内で確認されています。

その名の示すとおり、燃え盛る炎を連想させるその造形は、芸術家・岡本太郎氏をはじめとする多くの方に愛され、いまなお人々の心を惹きつけてやみません。

こうした火焰型土器に象徴される縄文文化は、日本文化の源流であり、浮世絵や歌舞伎と並ぶ厳然たる存在です。これをオリンピック・パラリンピックという国際舞台で世界に発信することで、日本文化を大いにアピールすることができるものと考えます。

新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町で構成する信濃川火焰街道連携協議会は、これまで 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に火焰型土器の造形を提案し、その実現に向けて活動してまいりました。

つきましては、聖火台デザインに火焰型土器の造形が採用されますよう、特段の御配慮をお願い申し上げます。

平成 27 年 10 月 2 日

國學院大學名誉教授	小林 達雄
新潟市長	篠田 昭
三条市長	國定 勇人
長岡市長	森 民夫
十日町市長	関口 芳史
津南町長	上村 憲司